法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-04

# 〈書評〉西川英彦・岸谷和広・水越康介・金雲鎬著『ネット・リテラシー ： ソーシャルメディア利用の規定因』

澁谷, 覚

(出版者 / Publisher)
法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
イノベーション・マネジメント / イノベーション・マネジメント
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
163
(終了ページ / End Page)
166
(発行年 / Year)
2014-03-31

Hosei University Repository



＜書評＞

# 西川英彦・岸谷和広・水越康介・金雲鎬著 『ネット・リテラシー ―ソーシャルメディア利用の規定因―』 白桃書房、2013 年 3 月

澁谷　覚

## 1. 問題意識と研究目的

さまざまなソーシャルメディアが栄枯盛衰を繰り返す理由として、ソーシャルメディアのビジネスモデルや競争優位に着目するだけでは不十分であり、ソーシャルメディアを利用するユーザー側の「飽き」や「疲れ」、ひいてはユーザーのリテラシーにも一因があるのではないか、という問題意識が本書の出発点である。そしてこのような問題意識にもとづいて、消費者のソーシャルメディア利用を規定する要因として、ネットに関わる能力としての「ネット・リテラシー」という概念を設定している。本書の研究目的は、この「ネット・リテラシー」とはどのような能力であるかを明らかにすることである。

## 2. メディア・リテラシーとネット・リテラシー

### 2.1 メディア・リテラシー概念のインターネットへの拡張

本書は第 2 章において従来のメディア・リテラシーに関する先行研究を概観し、従来のマスメディアを前提としたメディア･リテラシーを､単に能力やスキルを指すだけでなく、メディアによってもたらされる情報を情報源や文脈に位置づけつつ批判的かつ多様に解釈することと定義づけている。その上で、このようなメディア・リテラシーをインターネットなどの今日的なメディアを前提とするネット・リテラシーへ拡張することを試みる。

その際に重要なのは、従来のメディアとインターネットとの間のさまざまなメディア特性の相違である。筆者らは、両者の大きな相違点として、(i) インターネットは地理的制約や空間的制約を超え未知で多様な人々との遭遇を可能にする点、(ii) インターネットは時間的拘束を伴わない非同期型メディアである点、の 2 点をあげている。これらの特徴のためにインターネット上での社会的交流は従来型メディアにおけるそれよりむずかしいものとなっており、さらに使用能力、受容能力もインターネットに特有の特徴を有するという。

Hosei University Repository



### 2.2 ネット・リテラシー

これらの観点を踏まえて本書が提示するネット・リテラシーを構成する 3 つの能力は、(1) ネット・コミュニケーション力、(2) ネット操作力、(3) ネット懐疑志向である。(1) はインターネット上でのコミュニケーションの特徴として、既知の関係だけでなく未知の人々とつながることそれ自体を重要視する傾向を背景として、そこから生じる独自のコミュニケーション・スキルを含む概念として設定されている。(2) は複雑化する機器の操作力であり、インターネット上でのコミュニケーションには不可欠の能力である。(3) は従来のメディア・リテラシー論においても論じられてきたものであり、そこではメディアを通じて一方向的に与えられる情報を批判的に解釈し受容する能力が必要であるとされてきた。本書では、多種多様な情報が氾濫し、また広告とコンテンツの境界が曖昧なインターネット上では、特にこのような能力が必要とされると述べている。

## 3. ネット・リテラシー概念の検証

### 3.1 mixi データを用いたネット・リテラシー概念の検証

第 3 章以降では、以上のような考察を経て設定されたネット・リテラシーの 3 つの構成概念を、さまざまな角度から検証している。第 4 章では mixi の利用継続者と離脱者に対して、これら 3 つの能力についてデプス・インタビューを実施し、確認を行い、第 5 章ではネット・リテラシー概念の尺度開発を行っている。第 6 章では mixi のサービスの変遷をネット・リテラシーを構成する 3 つの能力と関連づけて分析し、mixi の利用と、ユーザーのネット・リテラシーが相互依存関係にあったことを例証している。第 7 章では、mixi の利用継続者と離脱者のネット・リテラシーの量的な比較を行い、ネット・コミュニケーションに関して継続者が離脱者より有意に高かったことが示されている。さらに第 8 章ではネット・リテラシーの 3 つの能力を独立変数、mixi の利用頻度を従属変数とする量的な解析を行い、ネット操作力とネット・コミュニケーション力が mixi の利用頻度に正の影響を、コントロール変数として導入した年齢が負の影響を、それぞれ与えていたことが示されている。すなわち mixi の利用に関しては、ネット操作力とネット・コミュニケーションが高いほど、年齢が低いほど利用頻度が高かったのである。ただしこのモデルの自由度調整済み決定係数は.069 と低かったことも報告されている。

### 3.2 ネット・リテラシー概念の国際比較による検証

第 10 章以降では、facebook を用いてネット・リテラシー概念の国際比較による検証を行っている。第 11 章ではネット・リテラシーや facebook の利用頻度、facebook への態度を日米韓で比較し、ネット操作力とネット・コミュニケーションは米＞韓＞日、ネット懐疑志向は米＞韓≧日（韓国と日本の間に有意差なし）であったことが報告されている。また利用頻度は米＞韓≧日、態度は米＞韓＞日であった。

第 12 章ではサイト離脱・継続者とネット・リテラシーの関係を、日米韓 3 国の facebook ユーザー（継続者）および離脱者から成る約 3,000 名のデータを用いて検証している。分

Hosei University Repository



析の結果、ネット操作力、ネット・コミュニケーション力、ネット懐疑志向のいずれについても、継続者が離脱者より有意に高かった。

第 13 章では、facebook の利用頻度にネット・リテラシーの各能力が及ぼす影響を検証しているが、ここでは回答者が「日本かどうか」および「米国かどうか」のダミー変数も導入している。分析の結果、ネット操作力とネット・コミュニケーション力、年齢および米国であることが facebook の利用頻度に有意な正の影響を及ぼしていることが示されている。

### 3.3 匿名性と mixi 利用頻度の関係

また補論として、mixi ユーザーの回答データを用いて匿名性とリテラシーおよび利用頻度の関係についての分析を行っているが、総じてリテラシーが高いユーザーが実名を提示しやすい傾向があること、および実名性傾向の高いグループの方が利用頻度が高い傾向があることが示されている。

## 4. 考察

### 4.1 国際比較について

以上に概略を述べたように、本書では前半において国内の mixi ユーザーを対象にネット・リテラシーの概念の開発と検証を行い、後半では国際比較によって確認を行っている。ただし第 12 章で行われた「国際比較」は、3 国の（離脱者を含む）facebook のユーザー・データをまとめて分析したものであり、国内の mixi による検証結果と、facebook による国際的な検証結果とを比較するという意味での、やや変則的な比較となっている。すなわちこの章で行われた分析は、離脱・継続へネット・リテラシーが及ぼす影響を 3 国間で比較したわけではない。しかしこの章における検証の結果、ネット・リテラシーが離脱・継続に及ぼす影響は、少なくとも mixi と facebook とでやや異なることが明らかになっており、facebook の方がより継続利用のために高いネット・リテラシーが求められる傾向が示されており、興味深い。このことは、補論で述べられている実名性傾向とネット・リテラシーとの関係にも一因があるかもしれない。なぜなら mixi より facebook の方が一般的に実名性傾向が高いことが知られているからである。

なお、第 13 章で行われた分析では、前述のように「米国であること」「日本であること」のダミー変数を導入したモデルを設定しているため、国際比較という目的により近づいた分析となっていると思われる。ただし、例えば共分散構造分析による多母集団の同時分析等の方法を用いることによって、より精緻に日米韓の比較を行う方法を採ることも可能であり、この点はやや残念である。

### 4.2 ネット・リテラシーが規定するもの

本書で設定されたネット・リテラシーとは、当然のことながらユーザーがソーシャルメディアを利用する上での基礎的能力を捉える概念である。このため、このような能力が特定のソーシャルメディア・サービスの継続利用者と離脱者で差異があるか否かという検証はきわめて興味深い知見であるものの、他方ではサービスの利用頻度やサービスへの態度

Hosei University Repository



等に及ぼす影響は、限定的であることも当然である。なぜなら、われわれが一般に何かを楽しむかどうか（正確には何かに対する好意的態度を形成するかどうか）、何かを頻繁に利用するかどうかと、その何かに関する基礎的な知識やスキルのレベルとは、関係はあるものの、後者が前者の大部分を説明するとは言えないからである。例えば自動車の運転を考えてみよう。われわれが自動車を頻繁に利用するかどうか、自動車の運転について好意的な態度を有するかどうかと、自動車の運転がうまいかどうかとは、もちろん関係があるものの、運転技能（リテラシー）が利用頻度や態度をすべて規定するわけではないことは明らかである。

例えば mixi の利用に関する調査としてしばしば引用される川浦他（2005）では、mixi の利用頻度にもっとも関連があったのは「mixi を自分の居場所と感じるかどうか」であり、また mixi に関する経験・行動を尋ねる質問に対して、もっとも多くのユーザーが選択した項目は「日記にコメントされたら、それに対するコメントを書かなければと思う」であった。実際にはソーシャルメディアの利用頻度や態度には、このような多様な要因が影響を及ぼしている。したがって、本書の第 8 章で報告されているように、mixi の利用頻度を、ネット操作力とネット・コミュニケーション、および年齢によって説明するモデルの決定係数が.069 と低かったことは驚くべきことではないし、このことが本書で設定されたネット・リテラシーの概念の妥当性や有用性を減じるものでもない。ただしこのことはまた、利用頻度や態度に正の影響を及ぼしたという分析結果をもって、本書で設定されたネット・リテラシーの概念が適切であることが裏付けられたと解釈することにも、一定の限界を伴うことを示している。

以上のような限界を伴うものの、本書はソーシャルメディアを利用するユーザー側の基礎的なリテラシーという、従来あまり着目されていなかった概念を探索的に設定し、尺度を開発し、さまざまな角度から検証したという点で、その着眼点、および議論の独自性において高く評価されるものである。また実際にソーシャルメディア・サービスを運用する側に提供する実務的インプリケーションについても、貢献が大きいものと思われる。

また後半の議論において、そもそもソーシャルメディアを利用するユーザーのリテラシーを国際比較した場合に、日米韓のユーザー間でどのようが差異があるのかを明らかにした点も、きわめて興味深い。

**参考文献**

川浦康至・坂田正樹・松田光恵（2005），「ソーシャルネットワーキング・サービスの利用に関する調査: mixi ユーザの意識と行動」，『コミュニケーション科学』, 23, 91-101.

澁谷　覚（しぶや・さとる）
東北大学大学院経済学研究科教授